熊日1971.10.13

隠れ水俣病

第三部

<7>

一斉健康調査始まる

水銀の恐怖明確に

単なる検診に終らすな

「おそすぎたが、とにかく一斉検診やることになったのはよか。これまでの水俣病認定患者は氷山の一角だ。具合いが悪かったっちゃ、みんな隠しとった。時代の流れちゅうのか、ようやく水俣病が表へ出始めた。一斉検診でまた患者がふえるだろうが、ふえて当然だ」―水俣市出月の田上義春さん(53)―

三十一年水俣病認定は、あつれる者でこう言う。今度こそ、水銀汚染の広がり、水俣病の恐ろしさがはっきりするに違いない、とすでにアンケート調査実施中の県の一斉検診の行方に期待する声は多い。

"水俣病はすでに発生期をすぎた" "何万人という住民の一斉検診をするのは、技術的にもむずかしい"。県はつい先ごろまで、こんな理屈で、チッソの有機水銀で汚染された不知火海沿岸一帯の住民検診に背を向けてきた。三十一年に水俣病が表に出(発生は二十八年からとされてきたが、もっとさかのぼるとする説が立証されつつある)て以来、胡火の局部的な疫学調査、県衛研の毛髪水銀量調査などが実施されはしたが、水銀汚染、住民の健康状況の"全体像"掌握は、まったく手がつけられず、事実上今日まで"くさいものにフタ"の行政が続けられてきた。このことが、公害の原点とされる水俣病の解明を、著しく遅らせる最大の原因となった。

市民感情への配慮

不知火海沿岸の初の住民一斉検診(水俣湾周辺地区健康調査)の第一次アンケート調査は、すでに五月から始まっている。対象は水俣・芦北・天草の一市五町約五万五千七百人(全人口の六六・三%)。アンケート用紙はこの二十三日ごろまでに回収、コンピュータ上で使って、疑わしいものはすぐ上げ、来年三月地元医師団で二次検診、さらにこの中から要精密検査者を水俣市立病院、上天草病院で三次検診の予定。

実施に当たる安武県公害課課長補佐は「アンケート項目は、先に胡火湾二次水俣病研究班が行なった調査(水俣市湯堂、月ノ浦、出月、天草郡御所浦町嵐口)も参考にし、専門の先生の指導も受けた。調査項目も新潟水俣病で同県が行なったのより六項目多くしている。ただねらいはあくまで地域の健康調査だ。九〇%は回収できるだろう」と言う。水俣病に対する微妙な市民感情を察してか、県はしきりに「病気全般を対象とした健康調査だ。その中で水俣病も拾い上げる。水俣病なら自覚症状がある人は申請すれば受け付けるんだから」と周囲に気を使っている気配がある。

一方、二次検診を担当する水俣・芦北医師会内にも「地域保健活動の一環として住民の健康データをつくるのがねらいだ。水俣病発掘はその一部分である」とする意見がある。気持ちはわかるとしても、一斉検診が単に網羅的な健康調査に終始するようなことがあれは、水俣病そのものはどこかに埋没してしまう恐れはないか。同医師会が四月に、水俣病多発地帯の茂道地区で行なった健康調査(一日診療所)では、一人の水俣病患者も発見できなかったが、今回も同じ結果を繰り返すのでは…と心配する向きがないではない。

患者は知っている

水俣病問題がいろいろ取りざたされることを好まない市民感情があることは事実だが、タブー視し、拒否反応を示したひとところからすると、住民の受け取り方はかなり変わった。"死活問題"などとひとごとの大さわぎした西湯の旅館街のある大手旅館主は「一時は経営が青息吐息ということもあったが、もう客さんも昔ほど神経質ではなくなった。このさい一斉検診を徹底的にやってすべてを明らかにし、もう大丈夫だということを一日も早く証明してほしい」と言う。「困難は多いが、一生懸命やる。水俣病を根絶するため、今度こそきびしい姿勢で臨む」(緒方惟治水俣・芦北医師会長)

のことは通り、行政や医学が、水俣病を真っ正面に見据えて、潜在患者発掘に当たってほしい、というのが、天草、芦北を含めた検診対象地区住民の期待ではなかろうか。

水俣市茂道地区で保健婦による一斉検診のアンケート調査

さる一月水俣の茂道地区で、ネコが狂い死にした"事件"があった。「さては、また…」と胡火の関係者がおっとり刀でかけつけたのは、いうまでもない。ところが、そのネコを見た地元の水俣病患者たちは「こら、水俣病じゃなか」と言い切る。案の定、解剖の結果はネコイラズによるものとわかった。「患者のいうことは、素直に聞くべきだなあ」とは、ある医師の述懐だ。原田正純熊大精神神経科講師は「患者の訴えにはじっくり耳を傾けなければ、一斉検診という実績だけつくって、あとはフタというのは困る。病像の変化をよくみつめ、慎重に検診すべきだ。一度やって、すべてが終わったとは決していえない」と力説している。